



## 目次

- 1 国際フィールドワーク
- 4 ふくし AWARD 受賞者
- 4 在学生の声
- 5 地域での実践を通じての学び
- 6 提携校への留学報告
- 7 学部最優秀卒業論文賞の紹介
- 7 卒業生は今
- 8 新任教員の挨拶
- 8 卒業後の就職・進路状況



## 国際フィールドワーク：フィリピン、マレーシア、カンボジア、ラオス、アメリカへ行ってきました！

### 地域開発の基本を学ぶ

#### フィリピン研修

中西 哲彦 准教授



今年度も、国立フィリピン大学デリマンキャンパス（ケソンシティ）を拠点とした2週間にわたる研修が実施されました。テーマは「地域開発のあり方・共同と参加」でした。大学ではワークショップを含めて6つの講義を受け、地域を支援する活動をしている組織4つを訪問し、活動内容を聞く機会を得、マニラ市内と郊外にある、いろいろな問題を抱える地域（コミュニティー）5箇所を訪ねる機会がありました。

大学では、地域開発についての基本的な考え方、手法について、ワークショップも交えて学ぶことができ、大学の外では、地域開発の実際の現場を見ることができ

ました。講義で「時間はかかるが、住民が参加した形での意思決定の積み重ねが、地域を変えていく過程では不可欠である」と学ぶだけではなく、「劣悪な住環境から、どのように脱却しようとしているのか、また、どのような支援が行われているのか、住民と支援に関わっている人たち双方から、実際にその場に行って話を聞く」といったことが繰り返されたのがこの研修の特徴でした。

World Youth Meetingに参加した学生たちとの楽しい交流や、ホームステイもありました。国際福祉開発学部としての学びの基本を、フィリピンで再度確かめる有意義な研修でした。「フィリピン研修でよかった。とても濃い二週間だった。」と学生達が報告書に書いてくれたことが、私には一番嬉しいことでした。



## 多民族社会に触れた 2 週間

### マレーシア研修

齊藤 千宏 教授



マレーシア研修も他の研修同様、2月12日から2週間にわたり、13名の学生が参加して実施されました。例年通り、ペナン島にあるマレーシア科学大学（以下、USM）が研修に協力してくれました。

今年は「マレーシアの社会福祉を学ぶ」のテーマのもと、関連した講義、福祉事業に取り組む団体への訪問が数多く用意されていました。同時に、観光や野外アスレチックなどのリクリエーション、そして目玉のホームステイと盛りだくさんのプログラムをこなしました。

同国研修は毎年、USMの学生有志がバディとして本学学生に研修期間中ずっとアテンドしてくれます。今年もバディ学生との交流を通してマレーシアの若者が何を思い、どんな生活をしているのかなど、彼・彼女たちへの理解を深めることができました。

ペナン島はマレーシアのなかでもっとも多民族社会といわれています。同国の平均的な社会とは異なって中華系人口の割合が多く、マレー系、インド系の民族グループがそれぞれの宗教（儒教の影響強い中国仏教、イスラーム、ヒンドゥ教、キリスト教など）とともに存在しています。多民族ということは食事も多種多様なものが食べられるということです。

参加学生たちはこうした多様な社会がいかんにして共存できるのかという、21世紀においてもっとも重要な課題について少しは学ぶことができたのでした。



## やさしさは学びによって力となる

### カンボジア研修

影戸 誠 客員教授



正規授業でカンボジア・海外フィールドワークに出かけました。参加したのは「世界」を知り、世界とかわりながら、自己実現を果たそうと入学し、その世界への入口として“Cambodia”を選択した一年生たちです。

“アンコールワット”、“貧困”、ポルポトによる“教育破壊”など、カンボジアに対して一般的なイメージしかなかった学生たちも、事前研修（See）、現地研修（Feel）、振り返り（Internalize）のサイクルでの“体験学習”を通して、“確かな学び”を手にしたようです。

SEE・FEEL・Internalizeのサイクル

SEE：カンボジアの人口、歴史について事前に学ぶ。しかし知識に過ぎない。記憶の断片である。

FEEL：現地を訪れ、気温、騒音、目に入る人々の生活を通して、カンボジアを見る。より深い直観的な学びである。目の前にいるホテルの従業員から聞く給料、通勤手段、夢、家族の情報、教員研修センターや大学で展開された同世代との交流など、すべてが貴重な学びとなる。「学びは就職の手段であり、英語はより高いランクへのはしごである」と言うカンボジアの学生たちの姿勢と、自分たちの学びへの姿勢を比較しながら、学びそのものについて考えを深めていく。



Internalize：研修は見ることや感じるだけは終わらない。目の間にある事実をどのようにとらえ、付き合っていくのか、自分育ての糸口を見つけることが重要である。

「さりげなく飲む水、整然とした車の流れ」と「毎日買い求めたペットボトルの水、交差点の混乱と喧騒」と

## | サラダボウルの国 (USA) の文化と英語研修 アメリカ研修

小倉 美津夫 教授



アメリカ研修の魅力は、2週間の全期間をホームステイするところがありました。アメリカでの暮らしを実体験し、アメリカ人の生活様式、食文化、ホストペアレンツの職業など、まさにオーセンティックな学びが得られました。1人1家庭で生活するため、大学で学んだ英語でのコミュニケーションを試すことができました。

午前中3時間みっちり英語表現力を高める授業、午後は、協定校のクラークカレッジの学生との交流、ロケット作成の実習見学、バンクーバー市長表敬訪問、国際色

いった日本との対比を、帰国後も学生たちは心の中で反芻し、カンボジアの今後や自分たちとのかかわりについて、考え続けてくれているようです。この研修を糧に、世界とかかわっていく自分の方向と、在学中に達成すべき具体的目標を見つけてくれることを願っています。

豊かな Fort Vancouver High School の生徒たちとのグループワーク、Fort Vancouver Historic Site の歴史見学、半導体シリコン世界シェア No.1 の (株) 信越化学工業アメリカへの企業訪問、クラークカレッジの学生自治会とのディスカッションなど多彩な活動を展開しました。学生たちがさらに歓喜したこととして、バスケットボール発祥の地アメリカで NBA の試合を観戦できました。大歓声がわき起こる中、学生たちも大声で応援していました。

アメリカ研修でアメリカの家族ができ、友人ができ、今も SNS で繋がり交流を続けています。この学部での学びや学外での貴重な体験など発信してくれることを期待しています。



## | 自分の学びをさらに深めるためにラオス 人民民主共和国で研修

国際福祉開発学部 4年

石村 未来 (兵庫県立明石城西高等学校)



2月11日から2週間にわたり、ラオスの都市部と焼畑山村で調査を行いました。主な調査テーマは、①ラオス

の教育の現状、②貧困の定義、③男女の役割とは何か、④ラオスの子どもについてです。

①教育の現状については、いくつかの小・中・高校を訪問しました。国立大学の学部長や政府関係者にも話を伺いました。すべての生徒が学校に通える状況ではない、また、教師希望者もいる一方で、財源がなくて教師不足の状態が起こっているといった矛盾について知ることができました。②貧困については、今回のフィールドワークで、じっくり自分の中で考えることができました。事前学習で貧困とは何かを考えていましたが、現地でのヒアリングなどを通じて、貧困を定義することさえも簡単ではないことがわかりました。今後、日常暮らす中でも、貧困とは何か、豊かさとは何かについて考えていきたい思います。③ラオスにおける男女の役割については、男女の仕事の分担などについて、6つの村でヒアリングや参与観察を行いました。大事な決め事に女性がかかわることは少ないという実態がわかりました。大学でのヒアリングでは、今後は女性が積極的に会議等に参加する必要があると聞きました。④農村部では、子どもたちは午

前中は学校に行き、午後からは家事や家の仕事を手伝っています。お寺で修行している子どもたちの多くは、経済的理由から学校へは行けないが、親が教育を受けさせたいために入っている子供たちでした。皆が夢を持っていました。寺院が重要な教育の場のひとつであることもわかりました。

今回のヒアリングから、さらに二つのことを学びました。1つ目は、現地の言語を習得することの必要性です。役場の方や千頭教授に通訳をしていただきましたが、ラオス語で話す千頭教授の姿は輝いて見えました。通訳を通すと、あいまいさや微妙な意味合いの違いが生じ本当の答えにたどり着くことが難しい、相手とのより良い関係を早く築くためにも、現地の言語を話す

ことが必要だと感じました。2つ目は、ヒアリング方法です。今回、あらかじめ聞く内容を簡単に整理してヒアリングに臨みました。同じ質問に対しても様々な答えが返ってきたことは大きな収穫でしたが、用意した質問を機械的に尋ねてしまったことが反省点です。村の人たちからの答えを書き取ることに必死で、相手とのコミュニケーションが弱かったと感じています。今後、より深く相手とのやり取りができるようにヒアリング技術を磨きたいと思います。

将来国際協力を仕事にしたいという私自身の夢に向かって、貴重な経験を積むことができました。今回の経験を、次回別の途上国、また、日本国内で調査をする際には活かしていきたいと思います。

## ふくし AWARD 受賞者

### 優秀賞受賞者の声と作品

国際福祉開発学部 4年 山本由梨子 (愛知県立常滑高等学校)

ふくしアワードは、昨年度から東海キャンパスにて行われており、大学での学びや課外活動を通しての学びについて発表するプレゼンテーション大会です。今回は、44件の応募があり、当日は各部門、日本語部門と英語部門でそれぞれ4組が選ばれ、1月24日、最終審査のための発表を行いました。私たちは英語部門で応募し、「多文化共生」をテーマにコミュニケーションについて発表を行いました。どの発表も興味深く、またそれぞれの学部の特色が発表によく表れていたように思います。

日本語部門では、自分たちの活動が評価され新聞にも取り上げられたという発表があり、また英語部門では国際福祉開発学部からの参加者が多く、私たちの学部らしい英語プレゼンテーションを見ることができました。今回から、聴衆からコメントを直接受け取れるという仕組みができ、発表の合間に発表内容についての意見交流ができました。普段あまり交流することのない学部同士が、お互いの活動を知り共有する貴重な機会でした。

私たちは、異文化理解や、多様性について関心があり、それにつながる「コミュニケーション」に焦点を当てて



プレゼンテーションを作成しました。自身の体験談と、今までの大学での学びを重ね合わせて作成するうちに、異文化理解や多様性について改めて考えを深めることができました。異文化と聞くと、日本と外国というイメージが強いかも知れませんが、自分と相手、つまり個人と個人の間にも存在するという事に気がきました。自分にとって異文化である「相手」を尊重する姿勢を持ち続けることが重要であると認識しました。

在学生の声 —国際福祉開発学部では、多様なルーツを持つ学生たちが学んでいます—

### 中国で生まれて“日本人”として生きる

国際福祉開発学部 2年 市川 翔 (岐阜県 岐阜聖徳学園高等学校)

私は中国の四川省で生まれ、幼少期はそこで過ごしました。四川大地震の後、現地に留まることは危険だという判断から、母に連れられ日本にきました。当初は日本語が全く分かりませんでした。“あいうえお”から学習を始め、小学校での授業や友達との会話、自宅での必死の学習を通して、1年ほどで何とか意思疎通ができるようになりました。今は問題なく生活できています。言語

習得はまさに生きることであり、“必死さ”が必要なことを学びました。中国語を生かす大学進学もありましたが、中国と日本の学習環境や生活環境を比べて、国際福祉関係の仕事をしたいと強く思い日本福祉大学に入学しました。人々の幸せを念頭に、国力による「差」について考え、その「差」を埋める国際福祉の実践へと向かうことが、私の人生を充実したものにしてくれると思った



カンボジアで教員研修所に向かう市川君（右から4人目）

からです。

### 1年生の間に体験した国内・外でのアクティブラーニング

1年生の4月14日に熊本大地震がおきました。他の大学生や教職員とボランティアに出かけた先で、日本語ができずに困っている中国人被災者の助けとなることができました。中国にルーツを持つことも生かし、人のために何かをしたい、もっと役に立ちたいと思った初めての経験でした。

1年の8月には、World Youth Meeting という学部行

事で海外からの学生達と英語で交流する機会を得ました。これから世界でどう生きていくかを英語を使って話し合う機会となり、フィリピンから来た代表と深く学び合うことができました。

1年の最後（2月）に17日間のカンボジア研修に参加しました。私たちと同じように英語力向上に取り組む大学生や、教員研修センターで教師を目指す学生達とワークショップを共にすることができました。彼らの学びに対する必死さは、自分の将来と国のためでした。福祉について考えさせられたと同時に、英語によるコミュニケーション能力の大切さを改めて感じました。日本の健康保険制度を紹介する機会もあり、福祉とは、このような知識を共有することでもあると思いました。また対等な立場で、相手の思いをしっかりと受け取め、共により良い方向を探し求める大切さも感じました。

そして今、私はピースボートで地球一周をするための準備をしています。国際福祉での“自分の役割”を問い続け、さらに様々な人とかかわり、実践的な英語力を磨き、自分を育てる時間のために活用したいと思っています。

## 地域での実践を通じての学び

### 「わかもの学生団体マイプロジェクト」を通じて 東海市太田川駅周辺の活性化をお手伝い

国際福祉開発学部3年 新堀 亮（新潟県 東京学館新潟高等学校）



今までに行ってきた私の活動について紹介したいと思います。私達は1年生時、美浜キャンパスに通っていて2年生になったと同時にこの新しい東海キャンパスに移転してきました。最寄りの太田川駅も新しくなったばかりで駅周辺も賑わっていました。しかし、時間の経過とともに駅の賑わいも少なくなってきました。そこで、地域のため、東海市のために駅の活性化に関わろうと思い、学部内でメンバーを募りイベント企画の立案と実行をさせていただく機会を頂きました。大屋根広場で子供たちなどに遊んでもらうために人工芝を敷いてボールゲームなどを行い、多くの方に楽しんでもらうと同時に、この

ような企画に興味を持って頂きました。この企画を経験して、もっと東海市のまちと関わり、地域のために活動をしようと思い、一緒に企画したメンバーと「わかもの学生団体マイプロジェクト」という地域団体を立ち上げました。マイプロジェクトという名前には、“地域のためにこんなことやってみたい”という若者、学生たちの考えや、実際に地域の方々と一緒に企画、実行するという意味が込められています。まだこの団体として結果は残せていませんが、昨年度助成金の募集に応募したところ、知多信用金庫様から助成金をいただけることになり、この助成金を利用した太田川駅周辺の活性化の企画が進行中です。このような大きな企画は1人では絶対出来ない



ことですが、地域や行政の方々、先生方など多くの人が関わるのが成功に繋がると思っています。その中にあ

なたが含まれてもいいのです。一緒に東海市のため、地域のために活動しませんか。

## 熊本での被災地ボランティアに参加して

国際福祉開発学部 3年 澁谷 希望（長野県立飯田高等学校）

2月の熊本へのボランティアに参加したきっかけは、私が日本に長年住んでいる者として、日本の被災地と呼ばれる地域に足を運んだことがないことを悔しいと思ったからです。また、私は現在大学の災害ボランティアセンターに所属していてこのボランティアに参加することで、学びが深まると思ったため参加しました。

被災地では、NPO法人にしはらたんぼぼハウスの施設にお邪魔しました。スタッフや障がい者の方に教え

ていただきながら施設での仕事のお手伝いをしたり、いまだ山積みになっている支援物資の仕分け作業をしました。前半の2日間は少し利用者との壁を感じましたが、お手伝いをするうちに、私のことをその施設の一員



利用者さんと犬の五郎丸と私

として受け入れ、接してくれていることを実感し、うれしかったです。

ボランティア中に、街並みを見る機会がありました。ほとんどの地域が更地になっていましたが、倒壊したままの家屋、瓦が崩れかけている屋根、ブルーシートで覆われた家も見かけました。誰かの日常が突然、災害によって奪われる恐ろしさを痛感しました。今回のボランティアで学んだことや現地の人の教訓を、他の地域での減災活動に繋げていかなければと思いました。



施設に新しく置く棚を作るお手伝い

## 提携校への留学報告

### マレーシア科学大学交換留学体験

国際福祉開発学部 3年 浅野 光映（愛知県立日進西高等学校）

私はマレーシア科学大学に交換留学生として1年間勉強しました。大学では教育学部、人文学部、社会科学部、言語学部の講義を受けました。教育学部では現地の英語教育を学び、人文学部ではイスラム教哲学や、その他の宗教について学び、社会科学部では、マレーシアの産業開発について学び、言語学部では英語、マレー語と中国語を学びました。現地の学生は大学での学びに対する意識が高く、刺激を受けながら集中して講義を受けることができました。また、マレーシアはマレー系、中華系、インド系と大きく3つの人種が一緒に暮らす国です。最初は生活に慣れることが大変でしたが、ほとんど現地の人しか住まないキャンパス内の寮に住むことを選択し、それぞれの宗教、文化、言語の違いに対応していきながら、現地の人と同じような生活を1年間続けたことが、自分にとって良い経験になり自信にもなりました。またマレーシア科学大学では、欧米、ヨーロッパを含む様々な国から200人を



写真の右端が浅野君

超える留学生が学んでいます。授業で一緒に学んだり、学内イベントなどでの交流もあり、たくさんの友達できました。一緒に遊んだり、それぞれの出身国について語り合ったり、これらの時間は何ものにも代え難いものでした。

## 2016年度 学部最優秀卒業論文賞の紹介

## 「国際結婚で生まれた子供の文化的な帰属意識を育むファクターは何か ～インドネシアと日本のダブルを事例に～」

### ●受賞者の声

2017年3月卒業 天野 撫子

(インドネシア共和国バリ特別州 SMA Negeri 1 Bulanbatuh)



私が卒論でこのテーマを選んだのは、インドネシアと日本のダブルである自分のアイデンティティーについて、授業でプレゼンテーションをしたことがきっかけでした。ダブルである自分は「何人(なにじん)?」なのか、私のように2つの文化的背景を持って育った子供たちは自分のアイデンティティーについてどう考えているのか、ということに強い興味を持ったからです。

研究の調査対象は、自分のルーツを考える意味も込めて母親が日本人、父親がバリ人で、バリ島の中でもヒンドゥー教の影響力の強いウブド地区の子供達としました。彼らの言語環境や宗教活動、国籍に対する意識をインタビューで探り、考察して、出来上がったのがこの論文です。

実際のインタビューで得られた情報をどうやってまとめて、どのように結論へと導くかを日本語で考えるのは、日本語の文章を書くのが苦手な私には本当に大変な経験でした。ゼミの先生や友達の励まし、日本語チェックの支えがなければ、この卒論は完成しなかったと思います。

卒論の結論にも書いたように、2つの文化の間を自由に行き来できるのがダブルの特徴です。この特徴を今後も活かし、私もダブルの一人として、日本とインドネシアの架け橋となり、2国間あるいは世界を舞台に活躍したいと考えています。

### ●指導教員より一言

国際福祉開発学部 准教授 小國 和子



最優秀論文賞おめでとう。高校までバリで育った撫子さんが、日本での大学生活という大きな変化の中

で、たくさん不安もあったことでしょう。それでも1年生の頃から努力を惜しまず、英語プレゼンや国際交流の舞台で活躍し、日本語の学術書にも果敢に取り組んで卒業論文を完成させました。関係性と場に合せて「自然にスイッチが入るようなもの」だから「何人(なにじん)かと問われれば、インドネシアと日本のダブルです」が最も自然な答えだと、知人友人へのインタビューをはじめ、自らを振り返って言葉にし、セルフアイデンティティーに自信をもって結論を導いた撫子さんに、心から拍手を送ります。

同じように2つ以上の文化につながる若い人たちが、天野さんの背中をみて、勇気を出して新たな学習環境に飛び込んできてくれることを心待ちにしています。

### 卒業生は今

## 「青年海外協力隊」そして「NPO 法人アジア車いす交流センター」

国際福祉開発学部 I 期生 丹羽 俊策 (愛知県立丹羽高等学校)

「人の役に立つ仕事がしたい」そう思い志した国際協力の世界。大学生活での4年間は、1年生のフィールドワークでカンボジアを訪問したことを皮切りに、韓国、ラオス、ネパールと様々な地へ足を運ぶきっかけを与えていただきました。

そんな国際協力活動に目を向けていた、大学4年生を目前にした2011年。東日本大震災が発生。「いま自分の祖国である日本に、自分ができる事はなんだろうか。」そう問い直し、多くの方々と共に、日本福祉大学災害ボランティアセンターを設立。「途上国開発と

震災復興支援は、フィールドや文化の違いだけで本質は同じではないか。」との自分なりの考えと向き合いつつ、ひたすらに活動を続けた日々もありました。

その後2年間一般企業で勤め、国際協力機構(JICA)青年海外協力隊にコミュニティ開発隊員として参加。初めての現場での活動に、たくさんの迷いや自分の未熟さと日々苦闘しつつ、インドネシアの地にお邪魔させていただき、多くの現地の方々々に助けられ2年間の任期を全うしました。

主に青年海外協力隊では、中小企業支援や協同組合

支援を担当し、地域特産品のプロモーション活動やその他の販促支援、さらには活動をより円滑にするために、ファシリテーターとして多くの人々との関係構築に従事しました。

そしてこの4月よりは、認定NPO法人アジア車いす交流センターの職員として、ASEAN諸国（現在はタイとインドネシア）の障がいを持った方々への、車いすの寄贈、奨学金支援などに従事します。

まさに「国際」+「福祉」の現場を前に、縁を大切に、学んでいこうと考えます。



現地調査中の様子（写真中央が丹羽君）

## 新任教員の挨拶



**Kirstie Sobue 助教**

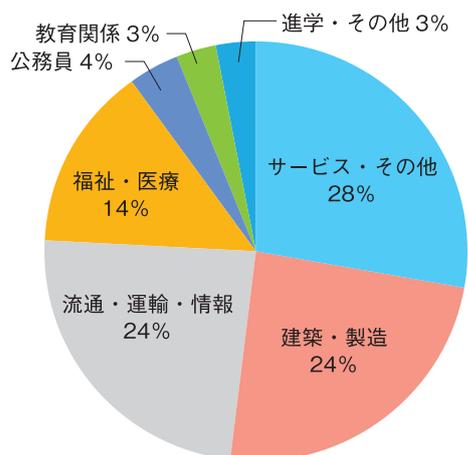
日本語教育

今年の4月から、日本語教師育成プログラムと留学生対象の日本語教育を担当することになりました。イギリスの湖水地方出身なので、「外」と「散歩」が大好きです。30年近く日本語を勉強しながら、通訳／翻訳家、外国人の日本語教師として勤めてきました。皆さんと一緒に「外国語としての日本語」の面白さについて色々話し合えるのがとても楽しみです。異文化理解や、自分と「他人」を繋げるコミュニケーションについて考えて行きましょう！

## 卒業後の就職・進路状況

### 企業・公務員・福祉分野に加え、青年海外協力隊も

巨大なグローバル・アジア市場を舞台とした人材獲得競争が激化する中、卒業生は中部国際空港でのインターンシップなどで培ったグローバル人材としての資質を活かせるフィールドを持つ企業へ進出しました。



#### 就職特徴

- 語学力を活かした、製造・サービス業、旅行・観光業への就職実績。
- 福祉開発の概念や福祉開発及び環境を射程に入れた地域づくりのあり方、そして、その地域実践への支援のあり方を学び、地方自治体職員へ
- 異文化理解の知識と開発問題に取り組み、国際力を活かし、青年海外協力隊へ

#### ○就職先

愛知みなみ農業協同組合、ドギーマンハヤシ、濃飛倉庫運輸、シティツアーズ、名古屋トヨペット、ネットヨタ東海、DCM カーマ、中電興業（でんきの科学館）、（福）サンライフ、東海市職員等

※留学生の就職先は、100%日本の企業でした。

発行人：日本福祉大学 国際福祉開発学部

〒477-0031 愛知県東海市大田町川南新田 229

TEL. 0562-39-3811 FAX. 0562-39-3281 <http://facebook.com/nfuiwd/>

編集人：国際福祉開発学部 学部長 吉村 輝彦、准教授 中西 哲彦

お問い合わせ：kokusai@ml.n-fukushi.ac.jp

国際福祉開発学部 ブログ

フェイスブック

